

文化学部国際文化学科「ルー」講座

「文化の“いま”を考える」

文化学部国際文化学科では、歴史、思想、文学・芸術に関するテキストや事象を扱うことを通して、人間及び人間を取り巻く多様な文化への深い理解と洞察力を育成し、その知見を活かし、社会の様々な分野で活躍できる人間を育てることを目指しています。「文化の“いま”を考える」をテーマとした本ルー講座では、人文学の先端で活躍されている先生のお話を通して人文学を学ぶ意義・楽しさを実感してもらい、今後の学びに繋げてもらいたいと考えています。

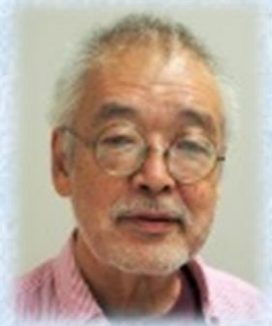
日時：11月30日（水）13：15～14：45

場所：大教室棟 514 教室

表現の「いま」を考える

講師：福間 健二（詩人・映画監督）

世界の「いま」と表現の「いま」がどうつながるのかを、とくに最近の日本の詩と映画作品の例をとおして考えます。福間健二さんは、研究者として、イギリスの現代詩の研究から、映画と音楽を中心とする文化研究へと視野を広げながら、40年以上にわたって詩作をつづけ、近年は映画制作にも力を傾けています。「ボブ・ディランをライヴァルとして詩を書いてきた」という発言もあります。自作を含む詩の朗読もしていただきます。



首都大学東京名誉教授。
2011年、詩集『青い家』で萩原朔太郎賞と藤村記念歴程賞をダブル受賞。
（詩集）現代詩文庫版『福間健二詩集』（1999）、『侵入し、通過してゆく』（2005）、『あと少しだけ』（2015）、『会いたい人』（2016）など。
（主著）『詩は生きている』、『佐藤泰志 そこに彼はいた』など。
（映画監督作品）『岡山の娘』、『わたしたちの夏』、『あるいは佐々木ユキ』、『秋の理由』など。



日時：1月11日（水）15：00～16：30

場所：大教室棟 516 教室

アメリカ文学の「いま」を翻訳する

講師：藤井 光（翻訳家）

21世紀に登場したアメリカ小説の特徴は、最初からアメリカの「外」との接点があるという前提で書かれていることです。創作自体に「翻訳」という要素が入り込んでいる、それが「いま」のアメリカ作家たちの姿です。では、それを日本語に翻訳するときには、どんなことが起きるでしょうか。具体的な文学作品の翻訳プロセスを交えながら、アメリカ文学と翻訳の関係を紹介していただきます。

同志社大学文学部英文学科准教授。
北海道大学大学院言語文化博士課程修了（文学博士）。
日本学術振興会特別研究員などを経て現職。
訳書、テア・オブレヒト『タイガーズ・ワイフ』が第10回本屋大賞翻訳小説部門第1位に選ばれる。
（主著）*Outside, America: The Temporal Turn in Contemporary American Fiction* (2013)、『ターミナルから荒地へ 「アメリカ」なき時代のアメリカ文学』(2016)
（翻訳）サルバドール・ブラセンシア『紙の民』、ダニエル・アラルコン『ロスト・シティ・レディオ』、アンソニー・ドーア『すべての見えない光』など。